

大楠公

徳川景山

豹は死して皮を留む 豈偶然ならんや

湊川の遺跡水天に連なる

人生限り有り名は尽くる無し

楠氏の精忠万古に伝う

【作者】徳川齊昭(一八〇〇〜一八六〇年)(享和元年〜安政七年) 幕末の大名。江戸に生まれた。景山(けいざん)・潜龍閣(せんりゅうかく)と号した。一八二九年、兄の水戸藩主斉脩(なりのおぶ)の死に伴い、藤田東湖ら藩政改革派の推戴(すいたい)により藩主となった。従来の兵法に西洋式軍備、軍事学を導入。藩校弘道館を設立し、社寺の整理にもあたるが、のち門閥派と対立、一八四四年幕命により隠居を命ぜられる。一八六〇年六十一歳にて没す。

【語釈】*大楠公：楠木正成の敬称 なお 長男正行(まさつら)を小楠公という。 *豹死留皮：『五代詩』に「豹は死して皮を留む人は死して名を留む」とあり 「豹でさえ死後に美しい毛皮を残す まして人は死後に名(立派な名声)を残さねばならない」の意 *湊川遺跡：大楠公とその一族が足利尊氏の軍に兵庫湊川で敗れ 戦死した跡。 *精忠：少しも私心のない純粋な心

【通釈】豹は死して皮を留め、人は死して名を留めるといふ諺があるが、人が名声を後世に残すのは決して偶然ではなく、必ずそうなるべき原因がある。南朝の忠臣大楠公が戦死を遂げた湊川の遺跡に来てみれば、川の流れが天に連なつて今も昔も変わりが無い。人の一生には限りがあるが、立派な人物の名声は、永遠に尽きることが無い。大楠公のように純粋な忠義の精神は、いついつまでも伝わつて、忘れ去られることが無いのである。